

第12章 3. アメリカ合衆国の発展 c.合衆国の経済発展(2)

③北部

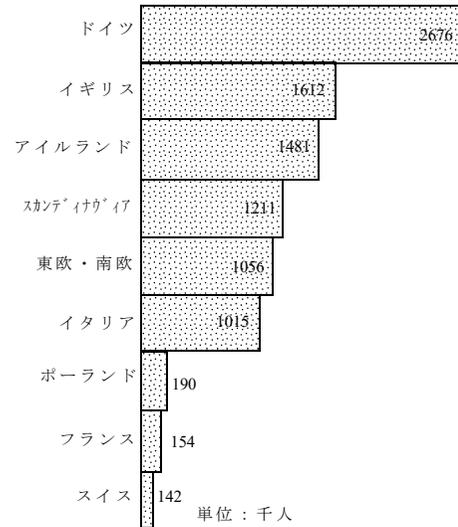
1)南部の安価な[1 工業原料]、西部の安価な[2 食料]の流入
保護貿易政策などによる広大な[3 国内市場]の成立

↓
=「北部は国内に広大な植民地をもつ」状態に

2)労働力=大量の[4 移民]の受け入れ
(19世紀中期 [5 アイルランド]人中心)
↓
東欧([6 ドイツ]系など)、南欧([7 イタリア]系など)
アジア(中国系=[8 苦力]、日系など)

3)石炭・石油・鉄鋼などを中心に急速な工業化が進展
→19世紀末には世界一の工業国に

4)産業独占の弊害の高まり
→1886[9 アメリカ労働総同盟](AFL)結成
1890 反トラスト法成立



ヨーロッパからアメリカ合衆国への移民(1870~1900年)

②フランス、[30 ナポレオン3世]による[31 メキシコ]出兵に反対→挫折させる

③国内の[32 ナポレオン3世]消滅→33 帝国主義的海外膨張の動き本格化

・[34 カリブ]海政策など=カリブ海地域・ラテンアメリカを勢力圏におく
・1889[35 パン=アメリカ]会議→アメリカ大陸での合衆国の主導性強化

1)[36 マッキンレー]大統領(1897~1901 共和党 25代)

・[37 高関税]政策による産業保護

・1898 [38 アメリカ=スペイン]戦争でスペインを破る→[39 キューバ]を保護国化、[40 フィリピン][41 グアム]島を獲得

・1899 国務長官[42 ジョン=ヘイ]の[43 門戸開放]通牒→中国市場への目指す

2)[44 セオドア=ローズヴェルト]大統領(1901~09 共和党 26代)→「45 棍棒外交」の展開

・[46 革新]主義をとり、資本家の行き過ぎを押さえる→[47 反トラスト]法を発動

・1905[48 ポーツマス]条約(←[49 日露戦争]の講和条約)締結を仲介

・[50 スエズ]運河工事に着手(1803 パナマ独立→1814 開通 運河地帯を租借)

戦争後、南部は北軍の占領下におかれ、[10 共和]党による上からの「再建」がすすめられた。このなかで[11 奴隷]制は廃止され、[12 綿花プランテーション]も解体、大地主たちは没落していった。黒人たちは奴隷身分からは「解放」されたが、経済的保障が一切なかったため、多くは[13 シェア=クロッパー](分益小作人)として過酷に条件で酷使された。さらに反北部・反黒人意識が高まりのなかで[14 クー=クラックス=クラン]団の結成など人種差別団体が力を伸ばし、黒人差別の構造は温存された。

西部の開発は急速であった。1849年発生した[15 ゴールド=ラッシュ]や1869年開通の[16 大陸横断]鉄道、さらに[17 ホームステッド]法は西部開拓のスピードを加速させた。こうして中西部は世界最大の穀物生産地域となった。しかしこうした急速な西部開拓は先住民である[18 インディアン]との対立・迫害をいっそう激化させた。

北部には、南部からは綿花などの[19 工業原料]、西部からは安価な[20 食料品]が流入、さらに[21 保護関税]貿易政策の採用により、北部は国内に「植民地」ともいえる広大な[22 国内市場]を獲得した。さらに大量の[23 移民]の受け入れにより労働力も供給された。こうして、アメリカでは、北部を中心に急速な[24 工業]化が進展、19世紀末、工業生産高は[25 イギリス]を超え世界一となった。大企業の成長はをおさえるため1890年には[26 反トラスト]法が制定された。また1886年には[27 アメリカ労働総同盟](AFL)が結成されるなど労働運動が激化した。

d.アメリカの膨張とラテンアメリカ

ラテンアメリカと太平洋地域中心 19世紀末から本格化

①[28 1848]年、カリフォルニアの獲得 1849 ゴールドラッシュの開始

→18世紀中期から[29 東アジア]方面への関心高まる

日本の開国強要=1854 日米和親条約、1863 日米修好通商条約締結

1867 アラスカ買収

アメリカはモンロー教書以降、アメリカ大陸への関心を持っていたが、アメリカ=メキシコ戦争で1848年[51 カリフォルニア]を獲得、翌年にはじまるゴールドラッシュで西海岸の開発がすすむにつれて、あらたに[52 アジア]方面への関心が高まってきた。ペリー提督による[53 日本]への開国強要、和親条約(1859)や日米修好通商条約(1863)締結、1867年ロシアからの[54 シベリア]買収などもこうした流れの中でとらえることができる。こうしてアメリカの膨張は[55 ラテン=アメリカ(中南米)]と太平洋を隔てた東アジアが中心となる。

アメリカは、南北戦争中のフランス[56 ナポレオン3世]による[57 メキシコ]出兵には強く反発した。こうしたアメリカの「膨張」政策は1890年代のいわゆる「[58 フロントニアの消滅]」以降本格化、カリブ海地域・ラテンアメリカを勢力圏におこうとする[59 カリブ海]海政策を展開、1889年[60 パン=アメリカ]会議で合衆国はアメリカ大陸で主導権を獲得した。さらに[61 マッキンレー]大統領(1897~1901 共和党 25代)は[62 アメリカ=スペイン]戦争で[63 キューバ]を保護国化するとともに[64 フィリピン]などを獲得、さらに[65 ハワイ]を併合して西太平洋方面への拠点を獲得した。さらに1899年には国務長官[66 ジョン=ヘイ]の名で[67 門戸開放]通牒を出し中国市場進出の方向を強めた。

かれのあとを継いだ[68 セオドア=ローズヴェルト]大統領(1901~09 共和党 26代)は、内政においては、前大統領の大資本優遇の政策を転換し[69 革新]主義で資本家の行き過ぎを押さえる[70 反トラスト]法を発動した。しかし対外的には前大統領の方向をひきつぎ、中南米への武力干渉をくりかえす「[71 棍棒]外交」を展開した。さらに[72 パナマ]運河工事に着手した。また日露戦争に際しては[73 ポーツマス]条約締結を仲介した。

その後、アメリカの中南米にたいする政策は「棍棒外交」から経済力の進出をめざす「[74 ドル]外交」へ、さらにウィルソンによるアメリカ民主主義の優位を説きその指導性を認めさせようとする「[75 宣教師]外交」へと変わったが、合衆国によるアメリカ大陸への干渉はつづいた。